

四月、春風にのせる人々の願い
今諏訪御柱祭



※1



※2

「杉になりたや諏訪社の杉に 諏訪社 御柱守り杉」
桜の花びらが舞う中、7年に一度今諏訪に木遣りの歌声が響く季節がやってきます※3。



今諏訪地区では信州諏訪大社と同じ千支が寅と申の年に御柱祭が行われます。今諏訪の諏訪神社は諏訪大社から諏訪明神が勧請されたと伝えられ、地区の名前の由来ともなっています。諏訪神社は上社(上今諏訪)と下社(下今諏訪)があり、その末社に春宮、秋宮、御柱社、十三所社、中島社などが位置しています。こうした神社の構成は、諏訪大社とほぼ共通しています。山梨県内で御柱祭を行う諏訪神社は2社に限られ、さらに里曳きまで行うのは今諏訪だけであり、諏訪大社との強い結びつきがうかがえます。御柱祭の歴史は古く、『甲斐国志』に

よれば江戸時代の延宝8年(一六八二)まで7年ごとに社中の木を伐り御柱社に建てる「御柱ノ神事」が行われていたが途絶えたと記録されています。しかし、幕末には復興され、現在まで続けられてきました。

祭りの数カ月前、西山で選ばれたモミの大木を、神事とともに山から曳き下ろす「山出し」が行われます。「里に下りて神となる」この時にも木遣り唄が山々にこだまします。御神木は上社27尺(約8.1m)、下社24尺(7.2m)と決められていました。伐り出された御神木は諏訪神社まで運ばれた後、氏子たちによって皮を剥かれ、御柱祭日を待ちます。

御柱祭り当日、上・下今諏訪地区それぞれの神社で神事を行った後、



御柱を村中へ曳く「里曳き」が始まります。行列は露払い、子どもたちが曳く舟、御神木、御神輿、神官、万燈、拍子木・金棒、山車など華やかな行列が続きます。御神木の里曳きでは御柱の先頭に乗った音頭取りが木遣りの唄をうたい、「ヨイトナ、ヨイトナ」という掛け声に合わせ、大勢の氏子たちによって少しずつ曳かれて行きます。御神木の両側には梃子方(てこがた)と呼ばれてこ棒を持った氏子がならび、進路を調整します。祭りの要は神様を御神輿に移して行われる練り歩きです。神様が集落内を巡り、災いを払う意味を持っています。続く万燈を持つ青年は「ヤッセイ、ヤッセイ」と唱えて3歩進み、万燈をくるくる回して「イヤサカサー※4」と叫びます。赤色の紙花で



飾られたヤナギが風にたなびき、祭りが彩られます。夕方、上・下今諏訪地区の集落を里曳きされた御神木は御柱社に集まり、社の東側に上社、西側に下社の御柱が建てられ祭りの幕が降ろされます。令和4年寅年の御柱祭は4月3日(日)に行われます。祭りでは伝統的に五穀豊穡や無病息災、家内安全などの祈りが捧げられてきました。その中で木遣り唄にはその時を生きる人々の願いが込められ、即興的にうたわれてきました。今年は春風にのせてこんな唄が響くそうです。「世界の平和は みんなの願い 天まで届け 木遣り唄」



※4：いやさか(弥栄)はますます栄えるの意味